

8-3 相談事業からケースの参考例を読む

巷野悟郎氏による相談ケースから

平成15（2003）年度 地域に開かれた保育所の活動に関する調査研究報告書

IV. まとめ

1. 巷野悟郎研究員による評価と考察

－相談事業を中心に子育てを考える－

1 最近の育児の背景にあるもの

子育ては人がこの世に誕生して以来、ごく自然に行なわれています。そして親は自分が大人になり結婚するまでに、身近で行なわれている子育てを見たり、ときには子どもにかかわりながら、子どもの成長発達していく様子を普通のこととしてきました。

従って自分が結婚して親になったとき、子育ては新しい体験ではあるけれど、それまでの生活の経験が大変役にたって、子育てはいつとはなしに夫婦の生活にとけこませていました。また身近な人たちからの暖かいまなざしや何かのときの励ましなどが、初めての子育てを、いつとはなく軌道にのせていたものです。

しかし今の親達は自分の子どもを初めて目の前にしたとき、子育ての戸惑いがあります。それは自分自身が育ってきた背景のなかで、子育てが遠い存在になっていたからです。そのためにこそ、現在は育児相談事業が必要となってきたのであります。そこで本事業を始めるにあたっては、当事者である親の子育てが、現在どのような関係にあるかを整理しておきたいと思います。

a 育児体験の少ない、子供を知らない親たち

母親の年齢は10代後半から30代までと幅広い年齢層ですが、平均すると育児中の母親の年齢は30歳前後で、しかも最多です。そしてこれらの母親の出生はおよそ昭和40年代で、昭和40年はわが国では第2次ベビーブームの頃でした。それと同時に親の社会参加ということで子育ては保育所へと移って、いわゆる委託保育の傾向となったのです。その結果は次第に街のなかから子どもの姿が少なくなって、いわゆる大人社会が到来、そのような雰囲気の中で育ってきたのが今の親たちということになります。

昔なら隣近所の子どもたちとの遊び、ときには赤ちゃんを抱っこしてみるなどの経験の中でいろいろなことを学んできたのに、そのようなことのないままに今の女性はあるとき母親となったと言えましょう。そこで実際にわが子を目の前にしたとき、どうしたらよいかわからないという事態が起こってきたのです。

育児相談では「ときどき泣くけれどよいだろうか」「夜中にも泣くのでうるさい」「離

乳食を始めてインスタントラーメンを与えたけれど食べない」などの質問があります。

乳児は大人を小さくしたものであるという感覚です。親になるまでに赤ちゃんを身近に見ていないからです。おむつを替えているところなどを見ていれば、赤ちゃんというものはという感覚であるはずなのに、突然母親になって何も知らないのですからこのような質問となります。「育児を知らないということすら知らない」ままの育児ですから、育児相談を担当するものは、このような親の背景を十分に知っておく必要があります。

b 育児情報の氾濫

昔、育児の知恵は隣近所の育児経験者からのものがほとんどでした。自分が子育てしたときの経験や失敗談を交えて、若いお母さん方に優しい言葉で話をしたものです。

身近な話でしたから、若いお母さんは子育てを生活の一部として理解したものです。

ところが今のお母さんは市販の育児雑誌からです。そこには先人の知恵が書かれているし、また最新の育児学からピックアップしたものがあられるけれど、近頃の育児雑誌の傾向として、読者からつづったものが、かなりのスペースを割いています。失敗談、成功談など身近なことが書かれてあるから、その中で自分の子育てに都合のよいような内容があると、それを取り入れてみる傾向があります。

一方お母さんは育児について誰に相談するかというアンケート調査を見ると、同年輩の友だちに相談するというのがたいていの調査でトップにあります。高校時代の友だち、産院で同室であった新しい友だち、いずれも身近な友人です。何かのときにその人に相談するわけですが、その友だちも自分と同じ情報源の育児知識だから、話をしているうちに意気投合して、それがよくても悪くてもいつの間にか育児の常識となっていきます。もしその内容が間違っただけであっても、それはいつの間にかその人の育児の知識となってしまいます。このようにして情報は友だちを通過するほどに確固たるものとなって、子育てを一つの方向に導いてしまうことがあるのです。その情報がテレビや雑誌の広告によるものであったとしても、同じようにしてその内容は育児にごく自然に取り入れられていきます。こうやって近頃の子育てが形作られてきているので、育児相談を受ける立場にある者は、母親と同じ育児情報源、例えば育児雑誌に目を通すことが必要であるし、育児に関するコマーシャルについても目を光らせておかないと、お母さんからの相談にうまく対応できません。

育児相談は幅広い知識が必要で、そのなかで何が大切か、間違いがあれば判断して整理しておかなければならないのです。

c 親の社会参加

子育て中の母親の半数は仕事のために家を離れます。時折のパートから朝から夜までの長時間労働など様々です。このような母親のために国は保育所という集団保育の場を用意していると同時に、一時保育、ベビーシッター、保育ママ、ファミリーサポートなど、様々な保育形態で、子育てを支援しています。

母親が子どもを育てるのはごく自然で、これは本来の姿であるけれど、社会の形態は時

代とともに移り変わってきています。そして親の労働時間のほとんどが昼間で、その昼間は子どもたちの発育にとっても大切な時間であることを考えるとき、親自身の育児の時間はますます短くなっていることにもなります。そしてその結果は、次第に夜に親子の時間をもつ傾向になってきています。親も疲れ、子どもも疲れた状態での家族の団欒です。昔に比べて親の労働が親子の時間を短くしていることを考えたとき、保育所はどのようにして子育て支援をするか、担当する一人ひとりの保育士にかかわった問題です。

保育士がお預かりする子どもの親との人間的な触れ合いの中で、親が子育てに意欲を湧き立たせるような雰囲気を作ってあげたいと思います。昼間は保育士が扱うとしても、夜は子どもにとって、大切な1日の中での短い家族との時間です。そこには保育士と子どもの結びつきにも勝る親と子どもとの関係があります。疲れて帰ってきた親が、子どもに向ける気持ちを湧き立たせるには、普段保育士と親との楽しい前向きの会話が必要です。親の子育てを勇気づけることは保育士の大きな役割と考えます。

d 大人社会の中の育児

少子高齢化の時代を迎えて、国は諸施策を策定しています。そして最も大きな問題として老齢年金など、長寿社会での問題に目が向けられています。たしかにこれは将来に向けての国民の福祉の問題ではありますが、同時に次世代は、現在の子どもたちが背負っていくのです。そう考えたとき、よりよい時代を構築するためには、現在の子育てはどうあるべきかということも、高齢者と同様の重みで考えていかねばなりません。

しかし、ややもすれば子どもより大人に向ける関心が強いようです。そして実際に街の中を見ても、子育てしにくい環境になってきています。ベビーカーで街の中を自由に散歩することもできません。若い母親は戸惑いをかくせない時代です。昔はどこでも胸を広げて母乳を飲ませる姿を見ましたが、今ではそのようなわけにもいきません。そうかといって、いつでも乳をほしがる赤ちゃんに乳を飲ませる場所は身近にありません。外出することが、母子にとってどんなにか大変な時代です。

家の中での母子の生活を見ても、少子時代で隣は何をする人ぞですから、孤独な子育てです。専業主婦の子育てにも対応しなければならぬ時代となりました。これも地域に開かれた保育所の役割で、保育士の役割は街から家の中にまで向けられていく時代となったのです。

2 育児の相談に当たって

a 親の訴えに耳を傾ける

育児は多様だから、医学的な問題は別として、答えは一つではないことがほとんどといってよいでしょう。

例えば10ヶ月で離乳食を食べないというとき、それをどう解釈するかは、そう簡単に判断できるものではありません。実際に乳汁の量が少なく体重増加も思わしくなく元気がない、顔色も悪いということであれば、これは医学の問題として取り扱わなければならないでしょう。しかし育児相談に訪れる場合は親の希望する「食べてくれない」ということ

があります。食べないと心配しても子どもはいつものように元気に遊んでいる、血色もよいというのがほとんどです。このようなときは子どもがこうあって欲しいという親の願望が、食べて「くれない」という言葉となって訴えていることがあるのです。子どもを客観視して、実際に食べなければ「子どもが食べない」という表現ですが、「食べてくれない」はそこにはかなり親の希望が心のそこにあると考えられます。

食べないということが相談の趣旨のとき、そこには夫婦間の問題や嫁姑との関係などが関係していることもあります。子どもの様子を見てお姑さんが「もっと食べさせなさい」といえば、お嫁さんの立場として、また子育てを知らない母としてもっと食べさせなければならぬのかということになります。

そこで相談の趣旨を解決するためには、食事はこれで大丈夫ということを理解させると同時に、夫婦間での問題やお姑さんの子育てに対する考え方の理解などが、解決の糸口となります。

相談の内容を聞きながら、主訴の背景にある主題を次第に感じとり、それをどうしたらよいかということをも本人が頭の中で整理できるようにして、自ずから解決の糸口を見出せるようにします。育児相談は聞き上手が第一で、親自身は話しているうちに核心に気がつき、食べないという主訴の原点を気付いていきます。

「こどもの城」の育児相談の経験では、親の方から自ら判断する言葉が聞かれるようになるには、およそ20分から30分かかります。その段階になると、親は子育ての背景にある問題点に気づき、自ら解決方法を見出していくことがあります。「食べてくれないのです」という言葉が、最後には「それでいいですね」という明るい言葉が返ってきて、同時にお姑さんとの関係も解決されていったりします。

育児相談では相手の言葉を大切にすることです。

b 育児指導ではなく助言

「指導」という言葉を広辞苑で見ると「目標に向かって教え導くこと」とあります。危険防止や病気の治療など、目標がはっきりしているものは指導によってよい方向に導くことができますが、子育ては目標はあってもそこにいく過程は様々です。回り道をして目標に達する場合もあるし、そのままよいという場合もしばしばです。目標に到達する道は、家庭によっても親の性格によっても夫婦間の問題によってもみな違います。従って相談を受けるものは指導するのではなく、そこに到達するために相談者がどうしたらよいかということのアドバイス、助言です。考え方を整理して、あとは目的に向かっての子育てを考えられるようにします。

例えば夜泣きで困っている相談も、育児書には一応の形として昼間のかまい過ぎ、夜の空腹、暑さ寒さなどが原因と挙げているものがありますが、そのようなことを解決したとしても治らないで泣くのが夜泣きです。そこで夜泣きを心配するときは、まず発育の段階で起こる生理的な現象なので、やがては自然に睡眠が上手になるから夜泣きをしなくなることを話します。しかしそれで納得したとしても、泣くことに変わりないので、それがそ

頃の子どもの正常の状態ということをお母さんに話すと、たいていのお母さんがそのような経験をしているということで、気持ちもかなり落ち着いてきます。しかし「夜泣きは生理的なもの」ということを理解させて、それでいいのですよと説明しても、現実には納得はなかなか得られません。それはいくら理屈を知っても、夜中に泣かれることのつらさには変わらないからです。そこで実際にどうしたらよいかということ、一緒に考えてあげると気が休まります。こうしたらという指導より一緒に考えることで、親はやってみようという気が起こり、あせらずにうまい要領を身につけていくようです。

c 楽しい子育てを

育児相談は子育てでどうしたらよいかわからないので、その回答を求めにくるだけでなく、今の子育てを確かめるなど、様々の理由があります。いずれも子育ての大変さが、その背景にあることを感じさせられる内容です。

しかしどのような心配があるにせよ、子育ては一時も休むことができないのですから、親の心配が解決されない限り、心配は益々濃いものとなり、子育ての自信をゆるがせてしまいます。しかしこうすれば解決するという答えを出すことは難しいけれど、一方では時間の経過とともに自ずと解決してしまうこともあります。そのようなことを経験しながら、親は子育てとうまく付き合う知恵がついていくものです。月並みな言葉で、そうやって「親になっていく」ということです。そこでどのような子育て上の心配にせよ、それと対応するときは常に前向きな考え方をもつことで、それが育児への自信を高めていく大きな力となります。例えば夜泣きに対する心配でも、それは発育経過で誰でも経験することであり、睡眠の生理が確立していく過程で起こる心配なので、やがては消失するということが理解できれば、乳児が「夜眠れなくて泣く」ということが不憫になって、何かと手をかけていることが、結果的には親子を結びつけることとなります。

子育ては大変な仕事です。そのために自分だけの時間がとれないし疲れます。何かと経費もかかります。そのようなことを考えたら子育てはますます大変だけれど、一方では子どもが育っていく過程での楽しさがあります。厚生労働省が生後半年の時点でのアンケート調査でも、これがはっきりと数字で示されています。子育ては大変ですかの答えは、大変が88%、一方子育ては楽しいですかの答えは、99%がイエスです。

子育ては大変だけれど、その裏には子育てをしてみなければわからない楽しさ、希望、夢などがあるということ、育児相談で感じ取ってくれるような助言をしたいものです。

d 個人の育児体験は最後に

育児相談で助言するときは、個人がそれまで経験した或いは学習した知識や技術をもとに展開していきます。しかしそれでもなかなか解決の糸口が見つからないことがあります。

そのようなとき、いろいろな事例をあげてこのようなことをした結果こうなったという例で説明することがあります。そのような事例は今までの相談例から選ぶことができるので、ふだんから蓄積しておくようにしましょう。相談する親の側としても、事例でこういふとき、こうしたらこうなったと説明されると納得、勇気づけられて自分もそうしてみよ

うという気持ちを湧き立たせたりします。普段から例をたくさん蓄えておいて、相談内容に適した例を持ち出すことは育児相談で大変効果的です。

しかしこのようなとき、ややもすると自分が子育てで経験した例を持ち出して相手を説得することがあります。このようなときは、自分はこうだったという自負が相手に強く伝わるから、相手に助言というよりその例にそった指導となりかねない危険があるので注意が必要です。

e 育児相談の結果

育児相談を受ける側のほうとしては、親からの育児相談が終われば、それで一応は目的は達したわけですが、その後、親がどのような子育てを展開しているかを知ることはできません。しかし相談を受けた子どもがその後どうなっているかを知ることは、相談を受けたものには大変勉強になるし、それが後の育児相談のあり方を育てていくことになります。親の側にしても、自分をフォローしてくれる相談者に対して、親密な関係が生まれることでしょう。それはこれからも迎えるであろう育児上の心配について勇気を与えてくれるかもしれません。

育児相談の終わったあと、相談者がその後どうなっているか、相談された内容がその後どう展開されたかなど、できるだけそれを知る機会をもちたいと思います。迷惑がかからない範囲で、こちらから電話や訪問でその後どうなっていますかと尋ねることができたら、親との信頼を深めることでしょう。

f 育児情報を勉強する

保育士になるためには基本的な勉強をしていますが、育児相談の内容は必ずしも教科書の内容通りのものではありません。それは育児というものは毎日の生活の中で、育児情報の飛び交う中で行なわれるのですから、保育所は親と同じ情報を共有していなければなりません。とくにお母さんは一冊以上の育児雑誌を読んでいるという統計もあるくらいですから、少なくとも身近な育児雑誌（月刊）に目を通しておくようにしましょう。施設内でみんなで廻し読みをするとよいでしょう。そして勉強会のとき気がついた問題をみんなで話し合えば、かなり印象に残ると思います。

また新聞の広告でもかなり育児情報を集めることができます。ある特定の育児法が大きな活字で目につくことがあります。それがよいか悪いかは別として、親はそのような内容に本能的に目が向きます。そして多くのお母さんがそれに注目したとき、やがてそれが育児の中で流布されていくことは、今までにもたくさん経験しています。

お母さんと同じ目線で世の中を見回したとき、活字やテレビの画面の中でたくさんの育児情報を集めることができます。夫々の保育現場に持ち寄って話し合いをすれば、お母さん以上の情報通になります。これが育児相談のときにたいへん役立つということを知っておきましょう。

3 育児の相談のかたち

a 親と保育者との会話のなかで

親と保育者が接したとき、そこでは何かと日常の子育てについて親から質問を受けることがあるでしょう。それは保育園の行事のときもあるけれど、日常では朝夕の送り迎えのときがあります。そのときは親と保育者と接するよい機会であるけれど、ときには親がそそくさと子どもを預け、或いは連れて帰ってしまうことがあります。

しかしそのようなときこそ、前日から登園時までの子どもの様子を聞き、保育士は1日にあったことを親に話すよい機会です。できるだけこの短い時間に情報交換して、子育ての自信と関心を寄せるような言葉かけをしたいものです。

子どもは集団の中ではいけないこともするし、迷惑をかけるということもあるでしょう。

しかしそれを親に知らせたほうがよいかどうかは、慎重であって欲しいと思います。例えば話さなければならぬことがあったとしても、それが発達的一段階として普通に見られることであるならば、それも子どもの成長の発達の一部として起こりうることだと前向きに説明して、そこまで成長したと報告してあげましょう。子ども同士はけんかも必要で、そのようなことを乗り越えながらからだは成長していく段階もあります。前向きに明るくお母さんにお話をすれば、お母さんの子どもに対する見方も、ずいぶん広がっていき、家庭での子育てに勇気を与えるに違いありません。

このようなこともお母さんとの何気ない会話の中で、保育士さんの言葉かけが子育てへの自信を与えるのです。一日中親は子どもと離れているのですから、今日はどうだったかということは最大の関心事です。夕方お迎えのときの保育士の言葉の一つが、子育てに大きくかかわっているということを感じて家庭へ送り出しましょう。

b 育児相談室での相談

場所と時間をきめて育児相談をすることがあります。予約制もあるし、曜日を決めて自由に来室したもらうこともあります。

これらの相談は親のほうから来られるのですから、それなりの相談内容をもっています。病気の診察と違って日常生活のなかでの子育て相談ですから、できるだけ雰囲気は家庭的にしましょう。ゆっくりとお茶を飲みながら対等の会話を心がけるのもよいでしょう。

このような雰囲気では園側は親からの話を聞く立場ですから、話しやすいように誘導します。そして時々お母さんの気持ちを聞くようにします。例えば「言うことを聞かない」というとき、それは自分の子だからこそいろいろなことが目についての相談なので、ほかの子どもの問題として考えたときは、言うことを聞かないということを感じて受け止めるに違いありません。

相談室のゆったりした雰囲気の中で、自分の子どもの問題を第三者のこととして冷静に受け止められるようになったら成功です。そうなるとうしたらよいか、自分から解決の糸口を見つけられることがあります。子育ては誰でもしていることなので、月日の流れの中では自分で問題を出して、自分で答えていることがずいぶんあるものです。そのきっかけをつくるのが保育士さんの役目であり、相談室の雰囲気でもあります。

c 電話による相談

家にいながらにして相談ができるので、電話による育児相談が普及しています。公立の施設などが子育て支援の一環として、あるいは民間のボランティアが行なっているところもあります。ことに最近は地域活動の一つとしての電話相談が多くなってきています。

電話による相談の利点は幾つかあります。

- ①育児の現場である家庭からかけることができる。
- ②こちらが誰であるか知れないので、話にくいことも電話を通じて訴えることができます。
- ③この相談に不満であるときは別のところで相談することができます。
- ④話の途中でいつでも切ることができます。
- ⑤視力障害者やからだの不自由な方にとっては外出しないですみます。

一方電話による相談には欠点もあります。

- ①言葉だけの相談なので、状況が十分に伝わらないことがあります。
- ②言葉が途切れると不安になり、双方が言葉を続けていなければなりません。

このような電話相談も園児の親であれば、普段の育児相談と同様ですから、子育て支援に大きな役割を果たしていくことでしょう。

地域の不特定の住民を対象とした相談の場合は、次のような注意が必要です。

一般の育児相談ではそこには常に相談者と受け手をめぐる雰囲気があります。しかし知らない人との電話相談では、相談者と受け手の間には声だけしかないということです。それは二人だけであって第三者が聞くことができません。二人だけの会話です。

しかも耳に押し当てた受話器からの相談ですから、ややもすれば受け手側である自分からの助言の言葉が最善のものと錯覚してしまうことがあります。そして電話相談の経験をつむほどに、相手の言葉に対する対応がワンパターン化してしまう傾向があります。

そこで保育所が地域の一般住民を対象として電話相談をするときは、同僚のいるなかで、誰かが聞いているという雰囲気があるということが必要だと思います。更に複数の人が電話相談を担当するときは、夫々を隔離しないで、お互いに声が聞こえるなかで相手と話すのがよいでしょう。電話という媒体を使ったときは、意識して日常の雰囲気を感じながら相手の話を聞くことが必要です。

d 手紙による相談

育児相談内容をしたためて相談することがあります。保育園では担当する子どもの親からこのようなことがあるのではないのでしょうか。自分の子どもの心配を直接話すことができなくて、夜遅く家人が寝静まってから手紙に書いて、担当の保育士に意見を求めるというような例です。この場合は一方的な文章からの判断ですから、その背景にあるものを知るのはむずかしいことです。

手紙で相談を受けたのですから、礼儀として返事を書くことにはなりますが、育児の領域では難しいので、手紙による相談に対してはよほど慎重でなければなりません。

しかもこちらからの答えが文字として残るわけです。従って私は手紙による育児相談の

場合は、それを機会にこちらから電話による相談に切り替えるのはどうかと考えます。文面だけからでは判断できないということをお話して、育児の背景までよく聞くことです。

育児雑誌などに掲載されているQ&Aはその本人にばかりでなく、すべての読者に理解してもらいからです、答えは幅広く書かれているのが普通です。それを読んだ読者は自分の子どもに置き換えて答えを出すわけです。

4 育児相談と責任

医者は病気を診断し治療します。その場合もし診断を誤ったり、適当な治療が行なわれないと、その結果は患者の生命にも影響を及ぼしかねません。従って医者診断・治療には大変な責任が伴っています。

育児相談も子育てで心配なことを相談するので、相談を受けたものがどのように対応するかによって、大きな責任を伴うことがあるでしょう。しかし治療の場合は、医者の指示のままに親が行動しますが、子育ての場合は相談者の助言をもとに親が判断して対応するのが普通です。例えば便利な紙おむつを使うとき、時間で取り替えるのと、赤ちゃんの様子をみて取り替えるのとでは同じように排泄を始末するにしても、赤ちゃんを中心に考えるか、親を中心に考えるかで、それは育っていく赤ちゃんにとって大きくかわることです。子どもの立場で取り替えるようにすると、おむつは早くとれるし、親の考えで時間で取り替えればそれは赤ちゃんの生理を考えないことだから、おむつのとれるのに時間を要します。更におむつがとれるということだけではなく、時間で取り替えるというその考え方が普段の赤ちゃんとかかわりにまで影響して、親子の触れ合いを少なくすることもあり、やがて子どもの心の育ちに大きくかわっていくことがあります。

そのような結果は相談者が助言してから、かなりの年月がたってから出るのですから、相談者はそれを知ることはできません。それだけに育児相談の責任の考え方はなかなか実感されないのが普通です。それでも育児相談の内容は子どもの育ちに関わるということを感じて、親に対応する姿勢が必要です。

5 育児相談例（NHKラジオ・電話による育児相談から）

相談内容：気に入らないことがあると頭を打つ兄（2歳0ヶ月）・妹（1ヶ月）

A—アナウンサー M—母親 D—巷野悟郎

A「お子さんは何歳でしょうか？」 M「2歳の男の子です」

A「ご相談どうぞ」

①M「あの一上の男の子が気に入らないこととか、悪さしたときとかに頭を床にぶつけたり」

D「えー」

②M「壁にぶつけたりするんですね」

D「えー」

③M「それと妹をこう．．．頭をぎゅっとやったり、ほっぺたを．．．悪気はないってわかるんですけども」

D「うーん」
M「押さえたりして、そういうときにちょっと、つい声を荒立てたり、ハッとすることもありますが、どういうふうに対処してやったらいいのかと思ひまして」
D「今2歳ですね？」
M「はいそうです」
D「で下のお子さんは？」
M「えー、一ヶ月です」
D「おそらくお母さんが妊娠なさったころから、お子さん変わりませんでしたか？」
M「えーどちらかと言うと．．．．あのー」
D「甘えてきたり」
M「うん甘えてはきてるんですけども」
D「それから過去にさかのぼると、妊娠と分かったころは1歳半くらいでしょ？」
M「そうですね」
D「1歳半ころ、なんとなくお母さんが変わってきたわけでしょ？」
M「えー」
D「そんなことをお子さんはもう感じてたでしょ？」
M「えー」
④D「1歳半から2歳半くらいというところは．．．．自己中心的でね。また心や体が発達する時なんですね」
M「はい」
D「ですから、自分の気に入らないことがあったり、何か周りがおかしい様子や雰囲気だと、お子さんはいろいろな態度で示しますよね？」
M「はい」
D「まして下が1ヶ月の赤ちゃんだから、お母さんが抱っこしたり、オムツを取り替えたりすると．．．．．母乳ですか？」
M「えーそうです」
D「飲ませてる時どうですか？上のお子さん」
M「片方を、ちょっとくわえたりもするんですけども（笑）」
D「ははは（笑）その気持ちわかりますね」
M「えー」
D「だって世の中の道理がわからないのですから、まだ2歳でね」
M「えー」
⑤D「それなのに、お母さんが赤ちゃんを抱っこして、おっぱい飲ませてる姿を見ればそれこそ嫉妬心ですよ」
M「はい」
⑥D「こういう時期はもう少し続くと思ひますよ」

M「はい」

⑦D「でももう少し経つてくると、だんだん分かってきますからね」

M「えー」

D「そういった時にお母さんが、上のお子さんを叱ったりするとかえって意識してしま
ってね、抵抗するような様子を見せますよね？」

M「えー」

D「ですから今、下の赤ちゃんが飲んでるとき、お兄ちゃんが片方のおっぱい飲んでる。
一緒に？」

⑧M「いえたまーにときたまオッパイといってパクッと、あの一口に含ませると違って
くるみたいで」

D「そんなとき落ち着くでしょ？何となく」

M「えーニコニコっと」

D「そんなことをたまに経験させてくださいよ」

M「あーそうですか」

D「赤ちゃんが寝ているときに、お母さんは上のお子さんと遊んでますか？」

M「えー、ボチボチやってるんですけども」

⑨D「ボチボチと言うよりも、それこそ赤ちゃんがいないつもりでね、一人っ子のつも
りでね」

M「えー」

D「お母さんが抱っこしたり、遊んであげたりして、そんなこと繰り返してる間にだん
だんとね、下の子がかわいくなってきますよ。これは時間の問題」

M「下の子が泣いてばかりいるもんで」

D「はい」

⑩M「ちょっとそちらの方にかかってしまうのですけれども」

D「そうですねーでもそういったことを上のお子さん見てるわけですからね。だんだ
んと納得できるようになりますよ。まだちょっと理屈がわからないのね、2歳ではね。赤
ちゃんは泣いてばかりで、自分で何もすることができないってことを知らないわけ
でしょ？」

M「はい」

D「それでお母さんが手をかける」

M「はい」

D「それを知らないわけですから、お子さんにしてみればあまりいい気持ちではない
ですよ？」

M「はい」

D「これは理屈じゃないんでね、もうしばらく、その時そのときね、お母さんが上のお
子さんの相手してあげてくださいよ。」

M「あー、はい」

⑩D「大変かもしれません。もうお母さんもよく分かっているでしょうけれども、こういう理屈をね」

M「はい」

D「どうしたらいいか迷ってしまいますよね」

M「それとですね、上の子がいたずらとかした時に、ごめんなさいは？って言っても言わないんですよ」

D「はい」

M「そういう場合. . . . 床に頭をぶついたりだとかしてしまうんですけれども」

D「そんな時に床に頭を打ったりするのも、おそらくはお母さんの注意をひくためにやるわけなんですよ。お母さんの見てない所ではやらないでしょ？」

M「そうですね」

D「お母さんも分からないでしょうけれども、やらないもんなんですよ」

M「はい」

D「おそらくいろいろなことをお母さんの前でやってると思うの」

M「はい」

D「赤ちゃんに何かするのね」

M「えー」

D「ただ赤ちゃんにするのは、お母さんがいない所でもやるかもしれませんから、気を付けないといけませんけど。そういうお母さんの気をひくためにやるんですから、その時に叱ってもかえって逆効果になってしまうのね」

M「はい」

D「それをむしろ認めるようなふうにお母さんが態度をとったら」

M「あー」

D「と、思うんです」

⑪M「無理に叱ってはいけないということですね」

D「そうそう無理に叱っても分からないんですよこの頃」

M「はい」

D「だってお母さんが他の人にとられてしまったわけでしょ？」

M「えー」

D「そのお母さんが叱れば、お子さんにとってはかえって辛いじゃないですか？」

M「はい」

D「ですから、その時はむしろ叱らないほうがいいんだけど」

M「あー」

D「なかなかお母さんも辛い、その時はね、片方では忙しいわけですから」

M「そうですね」

D「うん」
M「どうしてもちっちゃい子にいたずらしていると、かばってしまって」
D「そうそう」
M「お兄ちゃんを叱ってしまうようになってしまうので」
D「ですからその分ね、先ほど言ったように、赤ちゃんが寝てる時にでも、十分に遊んで気持ちを満足させてあげてください」
M「あーはい」
D「一方で、そういうことをやりながら、何かの時に母さんが話してあげればね、だんだんとお子さんも満足して、下のお子さんがかわいくなってくるんじゃないかと思います。こういうのはね時間の問題なんですよ」
M「はい」
D「もう少し経つてくると、下のお子さんも寝返りをしたり、お座りなんかしますね」
M「えー」
D「そうなってくると、上のお子さんの遊び相手になりますよね」
M「えーえーえー」
D「一緒におもちゃで遊んだりね」
M「えーはい」
D「そんなことで、あの一兄妹が作られていくわけね」
M「えーはい」
D「もうちょっと、お母さんは両方に目を向けてください。ひとつ」
M「はいわかりました」
D「と、いうことしかちょっと言えませんが、実際は大変ですね。こういうように下の子と年の差がない場合はね」
M「はい」
D「どうぞやってみてください」
M「わかりました。ありがとうございました」
D「よろしいですか？」
M「はい」
—それから7ヶ月後兄2歳7ヶ月妹7ヶ月—
A「2歳7ヶ月になりましたね」
M「はいそうです」
A「下のお子さんは？」
M「7ヶ月になりました」
A「その後どうですか？」
M「そうですね下の子も上の子になれたみたいなので、ちょっといたずらしてもキャッキャって笑ってることもあるので、前ほどはあの一下の子も泣かなくなったのですけれ

ども」

D「あの一前のときにはね、下のお子さん1ヶ月だったでしょ？」

M「そうです」

D「ご当人は2歳の頃でしたよね、2歳で何も分からないお兄ちゃんが、1ヶ月の赤ちゃんをかまったわけでしょ？」

M「はい」

D「その頃を考えてどうですか？今その頃のこと考えてみると？」

M「そうですねあの頃はまだほんとに、まだ認められないみたいなこともありましたし」

D「あ一下のお子さんをね」

⑬M「えー今は横にねっころがって、2人して笑ってることもありますけど」

D「あーそうですか」

M「えー」

D「じゃあある程度お友達みたいな、あるいはおもちゃ？」

M「えーおもちゃですね、でもやっぱり気に入らないことがあるといじめてます」

D「そうですねこういったことはまだまだ続きますね、それは」

⑭M「それであの一下の子も離乳食が始まったので、ボクもおかゆ欲しいとか、お母さん食べさせてとか、ぜんぜんもうなんか赤ちゃん返りしちゃって、あれなんですけども、このまま、しばらくのことだからいいかと思っているんですけども、よろしいでしょうかね？」

D「そうですね、もう少し経つと分かりますけど、まだまだちょっとね」

M「えー」

D「前のときは、赤ちゃんにおでこを当てるとか何かって、言っていましたよね？」

M「はい」

D「そういうような危なっかしいようなこと、そういったことはどうですか？」

M「たまにはやっぱりやっていますけれども」

D「たまにはやりますね」

M「えー」

D「どんなことやりますか？」

M「えっとほっぺをぎゅっとやったり」

D「えーうん」

⑮M「でもあの一上の子は、にらめっこしましょうみたいな感覚で」

D「はい」

M「下の子に言ってるんですね」

D「はい」

M「それをほっぺをびゅっと膨らますのを、まだ下の子はできないもんですから、逆に自分の手でほっぺをぎゅっと押さえているんですけども」

D「はい」
M「でにらめっこしましょうって、2人して言ったりしてるんですけども」
D「でも側からみると、ほっぺをつねっているように見えちゃうわけね」
M「えーでも上の子はそうじゃなくて、にらめっこしましょうみたいに言ってるみたいなんですよ」
D「あーだからその愛情表現が、側から見るといじめるように見えるけれども、やっぱりあれなんでしょうね、兄妹と言うか身近なものとして」
M「そうですね少しは理解してきたのかなとは思うんです」
D「はい」
M「であの、下の子が寝てる時にちょっと外に出ると、やっぱり赤ちゃんは？と聞くんです。で今寝てるよ、みたいに言ってるんですけどもやっぱり気になるみたいで、1人だけつれて出かけると、えー」
D「気になるわけ？」
M「えー気になってるみたいなんで」
D「ほう、もうだんだんと親のほうから見ると兄妹というね」
M「そうですね」
D「非常に身近なものという感じが見えますか？」
M「そうですね」
D「下のお子さんと外に出ることなんかもあるでしょう？」
M「はい」
D「そんな時は喜ぶでしょ？」
M「そうですねじゃあみんな散歩に行こうって言うと、とても喜ぶます」
D「でもどうですか、お子さんが1ヶ月の頃は随分とご心配なさったことがあったわけですけども、その頃と今と比べてみてね、当時は表現は悪いけれども、上のお子さんは何か動物的な何か．．．えー嫉妬というかそんな気持ちがあったと思うんですけども、今はなんとなくこう非常に近い人という感じでのいろんな態度でしょ？」
M「そうですね」
D「そういう危なっかしいことがたまにあったと思いますけど、その後どうですか？お子さんは下の子どもを可愛がる、むしろ何かしても可愛がるというようなことないですか？」
M「泣いたりしたとき、よしよししてきてというと、よしよしとやってくることもあるんです。（笑）」
A「当時のね、メモを見ますとね、お母さんが謝りなさいと怒ると知らん顔をするとか、床とか壁に頭をぶつけて泣くとか、お母さんの大変びっくりされた様子が浮かんでくるんですよ」
M「今でもあのーたまにそういうことはするんですけども、あのー以前よりは少なくな

ったと思うんです。気に入らないことがあっても……」

D「気に入らないときに、今までは言葉も十分でないから態度でもって頭を打ったりしていたけども、なんとなく言葉とか表情だとかいろんなことで自分の気持ちが表せるようになったんでしょ？」

⑩M「そうですねどうしたの？とこう聞くと、どうかこうとか言ってくれるんで」

D「何かわからないけども、何か自力で言って、それで落ち着くんでしょね」

M「そうですねはい」

D「楽しみですねだんだんと分かってきてね」

M「はいそれで先生、ちょっとおうかがいしたいんですけれども」

D「はい」

M「下の子連れて公園とか連れて行くんですが、時間的にあんまり長くはいれない、泣いたりとかそういうことをして、上の子は外遊びを我慢して家に帰るようになってやうんですが、先生はよく3歳くらいまでは、お母さんがみた方がよろしいですよとおっしゃってますよね？」

D「はい」

⑪M「でもなんかエネルギー有り余ってるみたいで、最近保育園とかに入れた方がいいのかなって思ったりもするんですけれども」

⑫D「これからは基本的なものが発達してきて、お友達とか集団の中に入っていく時期ですから、もしそういう機会があればたくさんのお子さんの中に入って遊ぶのは非常に良いことですよ」

M「あそうですか」

⑬D「はい自分の気持ちもだんだんと外に向いていく時ですからね」

M「あーそうですか。分かりました」

D「よろしいですか？」

M「はいどうもありがとうございました」

☆本相談についての考察（東京家政大学児童学科・加藤杏子）

Mの①、②、③から、上の子どもが自分の感情・欲求不満をどうしていいか分からないので、頭をぶつけるという事に没頭して、自分の気持ちを何とか落ち着かせようとしている様子がうかがえます。

③からは、妹に対するやきもちもあると考えられるし、Dの④にあるように、2歳の頃はブリッジスの系統図の、心や身体が発達するときでもあります。

上の子どもは下に赤ちゃんが生まれたことで、「母親が自分に関心がなくなったのではないか」という不安な気持ちでいっぱいなのではないかと考えられます。そのため下の子どもにチョッカイを出すことによって、母親の関心を自分に向けようとしているのでしょう。そこでD⑤、⑥、⑦は2歳の心理状態を理解してもらえるように伝えています。それに対してのMの反応は、改めて2歳の上の子どもの気持ちを実感したような深い返

事でありました。Mの⑧に、おっばいを2人で片方ずつくわえるとあります。

このような体験を通して、上の子どもは下の子どもを自分とはまったくの他人ではなく、少しは近い人なのだということを感じていると考えられます。

⑨のDは、上の子どもの気持ちを落ち着かせる方法として“一人っ子のつもりで”とMに提示していますが、それに対してMの反応は⑩、下の子どもに手がかかるので難しいといっています。それに対して⑪のDはMの気持ちをくみ取りながら納得させた結果、⑫Mは上の子どもに対する対応を理解したようです。

「その後」では、上の子どもは2歳7ヶ月になって、少しずつ下の子の存在を認めるようになったので、⑬のMのように、2人で笑い合うこともあるようになりました。このように、これからは同じ思いを共有することもどんどん増えていくでしょう。そしてきょうだいの絆が育まれていくであろうと考えます。

一方では⑭のMの言葉のように、上の子どもが「赤ちゃん返り」をしているようです。半年前は下の子どもの存在を認められなかったのが、少しずつ認められるようになり、「その後」のときには、下の赤ちゃんと同じようなことをしています。赤ちゃん返りです。Mはこの事に対して「しばらくのことだからいいか」というように言っています。Mの成長が伺える表現です。

⑮にあるように、Mも少しずつ子どもたちを観察し、遠くから見守ることができるようになりました。上の子どもの気持ちの中にも、下の子と遊ぶと楽しいという気持ちが芽生えはじめているようです。こういう体験が積み重なっている段階です。

⑯のMの言葉から、上の子どもも言葉が発達してきています。

2歳7ヶ月頃の心理状態は、以前より落ち着いてきているようで、自己主張が活発になり、いろいろ自分でやりたがり、興味もいろいろと芽生えてきています。⑰のDの言葉のように、集団の中へ入って、たくさんの方に触れ、吸収していくときです。⑱のMの前向きな考え方に対して、Dは⑲、⑳で、Mの背中を一押しして相談を終えています。